

間欠性跛行症例に対する運動負荷ABI検査の有用性についての検討

【目的】間欠性跛行を有する下肢閉塞性動脈硬化症をスクリーニングする検査として、安静時足関節上腕血圧比 Ankle Brachial Pressure Index (ABI) 検査は感度・特異度的にも優れた検査である。しかし、間欠性跛行の再現性や血行動態的变化をみるためには、運動負荷ABI検査が機能と運動障害を定量化するために適した検査と言える。今回、運動負荷ABI検査を用いて間欠性跛行の重症度を客観的に評価し、適切な治療法の選択や効果判定に有用かどうかを検討した。

【方法】間欠性跛行を有する症例に対して、高齢者の転倒を防止する意味もかね、エルゴメータで負荷をかけ前後でABIの測定を行った。ABI値の変化と症状の再現性を参考に血管内治療を行った。

【結果】単区域の病変に対する血管内治療は、術後の症状の改善、運動負荷ABI値の改善が見られた。多区域の病変に対する血管内治療後の変化は様々であるが、腸骨動脈領域の治療だけで運動負荷後のABI値はさがるものの症状の改善が見られ、大腿動脈以下の病変を保存的加療で見られる症例が以前より多くなった。

【結論】鼠径靭帯以下の血管内治療後の開存率は決して満足できるものでないため、血管内治療の適応を厳格に考える必要がある。間欠性跛行を改善させるのに必要な血行再建部位を同定するうえで、運動負荷ABI検査は非常に有用な検査と考えられる。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号